

## 未来を信じる

先日、ラジオ局のK-MIXを聞いていたら、川崎玲奈さんがパーソナリティーを務める番組で、映画「ウエスト・サイド・ストーリー」を取りあげられていた。貧困や差別の中で対立する、移民の若者たちを描いた名作だ。

番組内では、この作品が「怒り」からさまざまなものが生まれる、例えば愛さえも生まれることを描いている、と紹介されていた。この指摘に、私は感心してしまった。映画は、対立するグループ同士の「怒り」が、「暴力」へと向かう悲劇を描く。一方で、その対立の根底にある人種差別や社会の不平等への「怒り」があるからこそ、双方の男女は「愛」でそれを乗り越えようとす。確かにそう表現されている。

誤解がないようにしたいが、「怒り」の感情が、暴力という行為につながることは絶対に許されない。しかし「怒り」の感情は、差別や不平等を乗り越えようとする行動にも結びつく。「怒り」のこうした矛盾する二重性を、この作品は伝えている。

このラジオを聞いた後、最近見たドキュメンタリー映画「ヤジと民主主義 劇場版大版」を思い出した。安倍元首相が演説中、ヤジを飛ばした人々を北海道警が排除した。排除された人の中には、当時学生の女性も含まれていたが、彼女は「増税反対」と声を上げただけだった。この映画は、この出来事の検証や、裁判等の展開を追う。

だが、本作でその後の経緯を知って驚いた。この学生は、この出来事を期に、社会を知らなければと動きだす。その後、札幌地域労組に就職し、大きな声を上げられない人々を、支援するようになるのだ。

きっかけは「ささやかな怒り」。しかしそれが彼女の生き方を変化させ、困窮する人々を救う活動につながっていく。先の川崎さんの批評も含め、若い人がこのように考え、そして行動しているのを知って、新年のさまざまな事件で気分が沈んでいた私自身が、なぜか勇気づけられてしまった。

「ヤジと民主主義」は静岡のシネギヤラリーで上映中。浜松のシネマイーフで2月に上映される。(静岡文化芸術大教授)